

## 生物はなぜ死ぬか

著 者：小林 武彦(東京大学定量生命科学研究所)

判 型：新書 224 頁 定価(900 円 + 税)

出版社：講談社現代新書 2021 年 8 月 31 日(第 9 刷発行)

日本は平均寿命世界第 1 位となり、超高齢化時代を迎えている。人間は永く生き続けたいという願望、「長寿」を間違いなく手に入れたのだろう。何故、人間は「長寿」を手に入れることができたのであろうか。その理由の一つに、著者は人間が他の動物種と比較して一番感情豊かな動物であることをあげている。人間は死に対する「恐怖」を他の動物と比べものにならないほど強く感じ取るからではないかと述べると共に、人類の絶滅が高度な文明を築きあげてきたとも言っている。

『生物はなぜ死ぬか』と言う問いに一般的に誰もが「一生生きていられないから」と単純に回答するであろう。しかし、小林武彦氏は分子生物学的視点から進化論を展開させこの疑問について丁寧に説明をしている。

医療現場で検査領域を支える技師の方々は日々多くの検体や患者さんに対応しなければならぬ。最近、医療技術の進歩から我々の学生時代とは比較にならないほどの高度な医学知識や患者さんへの接遇について十分な学びが要求されている。しかし、検査業務に関わる医療従事者は直接患者さんの死と直面することは少ないであろう。「人が生きること・人が死をむかえること = 死生観」の意味を、医療従事者の一人として少し立ち止まって考えることも重要ではないかと思い、小林武彦氏の『生物はなぜ死ぬか』を今回紹介する。

著者は、我々人類を待ち受けている未来がいかなるものかについても最後にまとめている。私は、講義中に「どんな臨床検査技師を目指してい

るか」を学生に問うことがある。「AI に使われる臨床検査技師、それとも AI を使う臨床検査技師」の問いかけに多くの学生は、AI を使う臨床検査技師を希望すると頷く。臨床検査領域ばかりではなく、我々教員を取り巻く教育現場にも AI 技術が導入されるのも時間の問題と私は認識している(AI による教員評価が行われる可能性は十分にあるだろう)。確かに、診療において AI は人間より正確な解答を導き出し、患者さんへ最適な医療を提供できるばかりではなく患者さんと全ての医療従事者との信頼関係性も高めるものとなり得るかもしれない。しかし、これまで人類が築いてきた文明は、失敗の積み重ねや滅亡によるゼロからの新たな再スタートにより人類は高度な文明を築き上げ、現在に至っていることは世界の歴史を振り返れば明らかである。もし、この繰り返しが歯止めがかかったとき、人類の進化は停止するのだろうか。本書の最後に、人類のために AI が AI 自身を破壊(自殺)することになるかもしれないと結んでいる。この一文を目にしたとき、アメリカの SF アクション映画「ターミネーター」のワンシーンを思い起こした。

2016 年における日本人の平均寿命は、男性約 81 歳・女性約 87 歳となっている。しかし、この寿命の中には男性約 9 年・女性約 12 年間の不健康期間が含まれている。「長寿」を手中にしても約 10 年は何かしらの不健康な状況で生活しているというのが現実である。今なおコロナパンデミックの収束を見るに至っていないが、これまで

の歴史を紐解くと何回となく人類に襲いかかるパンデミックによって多くの人命が奪われている。

この新型コロナウイルスが人の遺伝子と近い霊長類を絶滅させる可能性が高いとも言われている。シーラカンス、オウムガイ、カブトガニは古代の時代から身を潜め、適応した環境の中で未だに生き続け、さらにジャイアントパンダは、解剖学的に肉食獣であるにも拘らず竹を食べて現時代を生き続けている。地球上の生物はいつも大きな脅威にさらされてきた。著者小林武彦氏の『生物

はなぜ死ぬか』は、幅広い領域の色々な問題解決のバイブル的書物になるのではないかな。

コロナと人類との共存の可能性やその時が何時やって来るかを、人間が導き出すのかそれともAIが導き出すかは定かではないが、興味深いと感じているこの頃である。

(玉内秀一：大東文化大学スポーツ・健康科学部  
hidetama@ic.daito.ac.jp)